

ら嘆をしました。

其中におきぬの七回忌が参りましたので、同人に親しくする者が『親方、おきぬさんの追善は華手に爲ひまし』と勧めますと『イエ私は華手に金も遣ひましたが、殆ど四年の間臭い飯を喰て考へて見ますと、一向詰ら無い理だと悟りました。乃でおきぬの追善も質素にして成だけ功德になるやうに致しませう』と云ふので、橋塙の仰願寺(眞宗)で供養をして、別に金三十圓育兒院へ納めておきぬの冥福を祈りました。之を江戸へ來た時の氣質に較べるとまるで別人の様でした。

嵐璃寛(舊師匠)が上京した時には、既に一

方の座頭で恐ろしい人氣俳優と成て居ましたから、璃寛も驚いて、自分で權十郎の家へ参り、師弟久し振で面會して、先年の失言を一方で詫れば、權十郎も、是併しながら師匠のお蔭で御座いますと喜んで、新川で璃寛の紋所花橘の印を菰がぶりに附させて贈りました。此時の得意思ふに餘りありで御座います。

(完)

市川八百藏身上談

市川八百藏述

五歳の時に伏見へ連られて往まして舞臺へ出ましたが、幼年の事の名何の役をしたか只今ではモウ覚えて居ません。一体生れが大坂です。

したから、其翌年尾上多見藏の弟子になり、尾上當次郎と云て大西の芝居(道頓堀)へ出勤して、近江源氏の小次郎をしたのが、先初舞臺で御座います。

夫から江州、伊勢路を興行して歩き、十二の年に名古屋へ来て、中山喜樂の弟子とも附く客分とも附ずに世話になりました。所が此喜樂、彦三郎さんの弟子に成て坂東鶴五郎と云ふ名を貰つた事が有て、其師範状が同人の手に在たのを借て、中山鶴五郎と改名して子供芝居の座頭で名古屋で興行して居ました。其人は尾州侯の附家老竹越の家來の悴で、仔細頃今の訥子も一座をして居ましたが、元來此が有て大徳寺の小坊主に成て居ました。或年

寺用が有て名古屋へ歸り芝居を見物に来て、俄に坊主が厭になり俳優になり度と云ふので、私の母が世話をして我家に置き到頭俳優にして、旅へ出るにも始終一緒でした。或年静岡邊を興行して歩き、大宮より三里奥の大鹿と云ふ村へ買はれて行きました。一村五十戸といふ僻地で、泊つて居る百姓家の庭の土が富士の麓の土に成て居て、十五年目で芝居が出来たと云ふ酷い所です。宿へ着た晩飯を炊て出して呉ましたが、何にもお菜がないから『何かお菜を煮て下さい、飯ばかりは喫られ無い』と云ふと宿の主人がハツタと怒つて『俳優と云ふ者は贅澤など思ふから米の飯を炊て遣たのだ。米の飯を喰てお菜を寄

越せつて……其様奴の宿は出來ぬ。今から出でて往て貰はう』と言出したので一同は大弱り。

其中に仲裁が入つて、漸と主人に勘辨をして貰ひました。恁云ふ僻地ですから定小屋が有

らう理は有ませんが、舞臺だけは出來て在于

平常は片附てあります。之を組立れば宜や

うに成て居ます。廻り舞臺もあれば、セリ出

しも出来るやうに成て居ると云ひますから、

強氣なものだと思つて芝居小屋へ往て見ると

廻しだから鍋蓋の大きなど同じとです。二重

を一つ置くか、人間が乗るかするとモウ廻り

ません。村の人は廻しがあるのだから是非遣

つて見せねば承知し無い。仕方が無いから辻

ら、今日では餘程開けましたらう。

東海道の吉原で興行して居ますと、甲府の龜

屋座から買ひに來たので、進退をして居る某
が手附金を取て往く約定をしました。すると
又一座の進退人で重助と云ふ者が、之を知ら
ず厚木(地名)の手金を取て約束をしたので
引張風となり、トゞ双方から吉原の屯所へ願
つて出る。處が此署長と云ふのが中々捌けた
人で、双方の芝居師を呼出して『其方達が俳
優を買って歸るのも金が儲けたい爲であらう、
然るに斯る双方より願ひ立て、裁判と相成る
日には早急には落着致さん、コリヤ俳優は米
中も日々三度の食事は致し居る。假令裁判に
勝ても此入費を引去る時は、連歸つて利益は

あるまい。依て雙方熟議を遂げ互ひに譲合た
が宜らう』と説諭されました。『イエ雑用が
嵩みましても宜しう御座います』と雙方で中
々折合ひません。依で署長が『夫では俳優を
呼出して、名々に行かうと思う方を云せて、
多數の方が連歸るとしたら宜らう』と云ふ
ので俳優一同屯所へ呼出されて、何方へ行か
うと思ふと聞かれました。兼て甲府と云ふ所
は良所だと聞いて居りましたから、皆同じやう
に『甲府へ往きたう御座います』と云つたの
で、厚木の方の芝居師は手金を取り戻して歸る、
甲府の方は大喜びで一座を連て龜屋座へ乗込
ました。今はどうなりましたか知りませんが、
其頃は隨分グチャ／＼した處で興行が不出来

で暫く鳥屋をして居ました。

俳優も鳥屋となると難儀なもので、子供ながら一同どうなる事かと心配して居ると、頭取

一座の進退人はまた静岡へ戻らうと云ひますから、私は成らうとなら東京を見物して歸り度が、

何程宛あつたら往かれるだらうと聞くと、一

人に一兩二分宛あれば見物が出来るだらうと

巧者なものが云ひますから、夫じやア東京へ

往て俳優冥利、東京の舞臺へ出て歸らうじや

無いかと相談を極て、名々一枚の着替を賣て

サア出立となると前申ます通りの懐合ですか

かりの大雨です。出立の朝に成つても中々霧れ

ません、けれども前申ます通りの懐合ですか

ら雨の歌むのを待て居る理には参りません。

したが、二度目に東京へ参りました時、奥山へ往く俳優など云たのは鳳藏芝居の俳優だと思はれたのだなど初めて気が附ました。

四ツ谷見附へ出やうと云ふ所に道が二筋に岐れて、其角に竹店が在て其隣に穢い旅人宿が在ました。未だに在るかと思つて先達ても通つて見ましたが、モウ無くなつて居ます。ともかく其宿へ泊りまして、進退人の某は濱町に知己があるから、其人に交渉して見やうと云ふので出掛ました。此濱町の知己の桙は坂東太喜三と云て太郎の弟子で、喜昇座に出たが居たかと思ひます。其人達の世話で一同喜昇座の後の今で云々下宿屋ですな、其家へ泊つて私だけは馬喰町の梅屋へ宿り、喜昇座へ

番金を買ってドシャ降の中で出立しました。三日間雨が降通して漸と高井戸で空が霧ました。御存じでも有りませうが甲州街道は酷い悪路で、年中牛車が通つて居るので、雨と來たら股の邊まで入ります。其時の難儀は今お嘆し申すやうな者じや御座いません。三日間に内藤新宿へ着ましたが、まだ明るい中でたたら股の邊まで泥だらけに成て居る。之を両側の格子の中で張見世をした。私は其時久留米飛白の單衣に兩山の摺た博多帶と云ふ袴へで、年齢が十六歳、鬚がありて眉毛を剃落して、夫で股の邊まで泥だらけに成て居たのが耳に入りましたが、其時は奥山へ往く……妙などを云ふとのみ思つて居ま

出る筈でしたが、折合無いとが有て其約束が破れ、此上は又田舎へ行くより外に仕方が無いと弱つて居たのを、一昨年歿した瀬崎の徳嶋樓の親方……まだ其頃は遊人で福嶋と云て居ましたが、如何にも可哀想だからと云ふのに話が極りましたけれども、座方では、田舎の子供俳優ばかりでは、何様とをするか心元無いと云ふので、今紅車、其頃は姫松、村山の龜はツちゃん外六七人助に出る事に成て本郷の若竹(席亭)の最一つ後の通りの若狭屋と云ふ宿へ泊つていよ／＼顔寄となりました、けれども着て往く衣服が無い、乃で福嶋の親方が市の字繋ぎの數寄屋の着物に、紺無

地の數寄屋の羽織を買って来て呉て、之を着て稽古に入りましたが、座頭の私が是だから其他の俳優は哀れ至極な形でした。

初日前に茶屋廻りをすると、此方は鄭寧に時儀をしても、向ふは横柄に構へて居て碌に頭も下げ無いで『お前さんが座頭ですか、ハ、ハ』とせら笑つて居ます、此方も癖に觸つたが旅俳優の悲しさに無念を堪へて初日を出しました。狂言が伊達の大木戸、吃又、法界坊でした。運に叶つて初日から大入で御座いました。打出して茶屋へ行くとガラリと様子が轉つて、サア此方へ、マアお上り被爲いと艶辭だらぐでしたが、乃が所謂芝居道で御座います。

其後同座へ出るのは今度が初めてです。

横濱を打上で船橋の大神宮の宮芝居へ買はれて行き、其が樂に成て東京へ歸り、馬喰町の宿屋に止つて居ると、其頃神田左衛門河岸に絹糸渡りの小屋（輕業師竹）が在て、其中へ出て、軽業と芝居とチャンポンに仕ろと云ひますから、私は承知し無い。遂て出よと云ふなら私は名古屋へ歸りますと言張ても中々歸しては吳ません。と云て軽業師の中へ出て、他日もし運に叶つて身分の立つ俳優に成た時『アリヤア絹糸渡りと一緒に芝居をした俳優だせ』と云はれる時には瑾だから、コリヤモウ夜逃

にする外はあるまいと決心して、平素兄弟同様にして居る千之助（飼子）に心を打明て咄を

此に可笑かつたのは、助に加はつた東京の子弟さんですね。此方は年中旅を歩いて何でも役さんです。當人達も苦しがつて今日は一人、明日は兩人と段々にドロンビヤツて、遂には壹人も居無くなりました。

一と興行十七日で六圓の給金でしたから随分苦しう御座いました。其頃新富町の芝居では伊達の實錄の新作で、一日見物に参りましたが『ア、旨い物だ、斯道に入つたからは、恁云ふ名人揃ひの中に入つて、修業がして見た』と思ひました。其中春木座で二の替りが出る、是も大入で（一の谷）三の替り（菅原、鈴木）まで打通して横濱の佐野松座（今改稱し）へ乗込みから小網町まで車代が二圓五十錢、なか／＼拂ひ切ません、依で尻を端折て手荷物を背負ひ、雪の降る中を小網町の河岸まで来て、品川通ひの蒸氣船宿の店に轉寐をして、翌朝しらゝ、晩に品川まで往て、此處から船に乗換て名古屋に歸りました。

二度目の上京は明治十二年で、中村座へ初めは市川中車、二度目から市川八百藏と成て名題格で出ました。此八百藏と云ふ名は中村勘三郎君が年來預つて有たのを、私に附て下す

つたのです。其後堀越さんが三升會を結びました時に、先代八百蔵も余が家から出たものだと云ふので、初めて門下に列りましたので御座います。其後は役らしい役も附す、何時も僅に五六枚の書抜を貰つて居ましたが、初めて紙數の多い書抜を受取りましたのは、出世景清の右幕下でした。其が最初で段々厚い書抜を受取るやうになりました。

松助さん、秀調さん、何れも記憶の良方ですが、私も以前は滅法記脇が良う御座いました。初めての狂言でも一日見ると臺辭からチヨボの文句までも悉皆覚えた物です。稽古の間に他の臺辭までも覚えて、舞臺で附た（他の臺辭を教へて遣るとなり）中村座が鳥越へ引移

りました時、團十郎が出勤をして、狂言が越後驅動に高時の天狗舞から義貞の太刀流しで川崎屋（權十郎）のが關根彌二郎と大佛貞直をして居て、書抜が百枚餘り有ります。然るに此川崎屋のが病氣をしたので、急に代りを揃へねばなりません。其頃私は二筋町に居りましたが、寐床に入つてウト／＼して居ると、表の戸をトントン敲くから「何誰です」と云ふと「芝居から來ました」と云ふと聲は聞馴て居る千田徳五郎（奥役）だから早速戸を開させると、徳五郎と初め頭取繁松、外臺人で見ると、徳五郎と初め頭取繁松、外臺人で實は川崎屋さんが急に病氣をしましたので、代を親方に願ふ積で書抜を持参しました」と書抜を出す。時間を見れば一時前。ハ、アこそ居ても黙つて居ます。私もマア好躰梅にスラ／＼臺辭が出たので絶句もせず。無事に代りを勤めました。以前は書抜を覚えるに苦んだとが御座しませなんだが、近頃はなかなか骨が折れます、全く齡の爲だらうと思ひます。

いつ方々へ往たのだが、書抜が多い爲に何處でも駆られて此方へ持て來たのだなと思つたが『マア宜しう御座います、置てお歸り被爲い』と二人を返したのが二時比でしたらう。其儘起て火鉢の傍に坐つて湯を汲ませ、此書抜を一通り目を通して了ふと、夜がしら／＼明ました、此で寐ると寐過すからと面を洗ひ朝飯を喰て居ると、芝居から迎ひが来ました。樂屋入をしてお作者部屋の前で『詰つたで悪く聞いて『生を云ふ奴だ、寧そのとに附て遣るまいせ。併し本を持って舞臺へは行て居やうせ、此方の落度になるから』と舞臺へは出

ますから』と云ひましたのを、お作者の方で悪く聞いて『生を云ふ奴だ、寧そのとに附て遣るまいせ。併し本を持って舞臺へは行て居やうせ、此方の落度になるから』と舞臺へは出ます。唯々驚き入るの外は御座いません。夫で

名人になられますなら、俳優は必樂な者は御座いませんハヽヽヽヽヽ

〔完〕

坂東秀調懷舊談

破 笠

男が女の身振をして一舉一動、眞に迫り、些細な處までも能く女の情を寫し出すのは難中の難であるが、坂東秀調の如きはまづ其伎倆に達せし者と云て宜らう（未だ其神を得たりとは申されまいが）名人とは參らずとも上手の域には達して居る、時代、世話、役々の性根を發揮して見物に感動を與へるに至ては當

今女の形中まづが第一である。惜いかな姿の美と臺辭の明快とを缺く爲に、其伎倆程に人氣の無きは殘念な事である。

嘸太夫も長の間……初舞臺の序幕から今日めでたしくの大詰に至る間には種々の事が有りましたらうね』と先某より尋ねた。

秀『私も別に經歷談と申して、御嘸でする様なとも有ませんが、戴難苦勞は隨分致しました。今の俳優の中で上から蛭の墮る所や雪の中を歩いて、青天井の筵ツ張の小屋で、見物が雨の時は傘をさして観て居るやうな船さんにて、私ぐらひの者でせう』と秀調は桐火桶の火を搔起しながら談した。之

を序開きに段々往事を呴したが、俳優の談には身振、假聲に面白い處があるので有るが、斯る事までは細密に記さず。讀者これを諒せよ。

秀私は尾州名古屋の生れで、親父は水田角藏と申して名古屋の芝居師で御座いました。先祖は織田殿の臣下で有たのださうですが、親父は年中旅から旅を興行して歩き、後に名古屋の守田勘彌と云はれた二代目中村歌之助が歿して、其後を嗣で太夫元となりました。私の初舞臺は五歳の年でした。

秀調と三四丁離れし所に住居したる某狂言の談に、彼人は最初の名を米丸と云ひ、先の小團治が名古屋へ来て芝居をした時、石川五

右衛門を演じた。其時に米丸が五郎市をして處が、殊の外高嶋屋の氣に入て『未怖しい子役だ、後には何様上手な俳優になるかも知れない』と感心して其時附た米丸である云々。秀夫から伊勢路を興行して歩いて、大阪へ出て米十郎と改名して七年ばかり各座に出勤して居ました。其間中國筋へ買れて往た事も有りましたが、備後の鞆で興行の時瘧を煩ひました。其頃は今と違ひ十三日間僅か二兩の給金ですから、醫者に掛けて思ふやうに薬を飲む理にも参りません。愚云ふ時には神頼みと、難用宿から程遠からぬ鎮守の神さまに祈願を込まして、夜が更ると参詣して病氣全快を祈るのです。すると或夜社頭に額引き祈念を凝